

17) 超音波内視鏡（オリンパス社製ラジアルセクタ式4号機）の使用経験

五十嵐良典・加藤 俊幸（県立ガンセンター）
齊藤 征史・丹羽 正之（新潟病院内科）
小越 和栄

当院において、昭和60年4月より超音波内視鏡オリンパス4号機を内視鏡検査の一貫として導入した。約30例に施行し、以下の知見を得た。

本法は非侵襲性であり、食道、胃、膀胱等の検査が一度におこなえる。癌の浸達度診断や、粘膜下腫瘍の性状診断や隣接臓器からの影響等の診断に有効である。しかし、超音波内視鏡を密着させにくい部位や、バルーンの使用によって粘膜面の微細構造の抽出が難しい点も認められた。

超音波内視鏡の使用に熟練することによって、短時間でかなり有効な診断を行なえと考えられ、今後普及発展する検査法と考えられた。

II. 特別講演

胃潰瘍治療の現況と展望

岡部 治弥 教授（北里大学医学部）

昭和60年度新潟精神医学会

日時 昭和60年11月2日（土）

午後1時～午後5時

会場 新潟東映ホテル

I. 一般演題

1) 妄想反応を呈した一卵性双生児不一致例

藤田 基・有田 忠司（新潟大学精神科）
飯田 真

橋 玲子（同 保健管理センター）

妄想反応を呈した26才の男子一卵性双生児の不一致例を経験したので報告した。急性妄想状態を呈したのはふたごの兄（A）の方で、弟（B）も一過性に軽度の妄想反応様のエピソードを経験したことがある。

ふたごは、父が石工を営む兼業農家の末子として生まれた。Bに新生児仮死があったほか、出産に合併症はなかった。父親は循環気質であり、母親は敏感性格で過干渉の傾向があった。乳児期はAのほうが1カ月位発

達早くふたごのなかで優位になっていたが、幼児期には両親によって兄弟の役割づけがなされ、Aは常に弟であるBに譲らされ自分の要求が通されなかった。小中学校では、Aは女子の友達が多くままごとなどを好んだが、Bは腕白に育った。二人とも普通高校卒業後に就職しているが、Aは卒業直前にBはその後相次いで軽度の妄想反応様のエピソードを経験している。その後もAは自己関係づけの傾向が続いたが、Bはより健康に適応している。A、Bとも共通して敏感性格であるが、Aが極端な対人的無力性を発展させているのに対してBは敏感性を代償するかのように対人的外向性を獲得している。両親との関係は、Aが母親との同一視が強いのにに対して、Bは両親に対する対向同一性を見いだしている。今回のAの急性妄想状態は、結婚、妻の出産、新築、目上の男性とのつきあいという、父親としての同一性が不十分であるAにとっては重い社会的負荷の下に発症した。

今回の症例は2人とも敏感性という、おそらくは遺伝的に強く規定された自己関係づけの傾向をもちながら、生育史の差によって対人パターンや統合力に大きな差を生じ、Bは他者とのコミュニケーションのなかで自己の誤信を修正できるが、Aはそれに度々失敗し妄想的確信にいたる。妄想性人格の発達史に関して遺伝因と生育史のかねあいについて考えるうえで興味深い症例であった。また、敏感関係妄想の発展を妄想の萌芽の段階とその発展に分けて考えると、Bは前者の要素のみをもち臨床的な妄想反応を呈するには至らないが、Aは後者をももち発症に至ったと考えられる。この意味で関係妄想を段階的にとらえる可能性が示唆された。

2) 一過性の憑依状態と種々の神経症様症状を呈した双生児の不一致例

滝沢 謙二・古谷野淳子（新潟大学精神科）
飯田 真

種々の精神障害の病因をさぐる上で、双生児研究は重要な方法の一つである。今回我々は一過性の憑依妄想とさまざまな神経症様症状を呈した一卵性双生児の不一致例を経験したので報告する。

症例はS41年生まれ、初診時19才の男性で双子の兄（A）がおり、症例（B）は第2子である。卵性診断により一卵性双生児と判定されている。

症例Bは、2才までは実父母と離れて祖母の下で養育されたが、発育も順調で、学校の成績も良く表面的には明るくいい子と思われていた。中3の時心因性の排尿